

過去・現在・未来を貫いて、 知の共同化の回路を地域・社会に組み込む ——大阪・上町台地境界での実践から

弘本由香里
Hiromoto Yukari

社会の枠組みが変化し、さまざまな問題が集積するなか、持続可能な未来へとつなぐにはどうすればよいか。過去からの歴史が理め込まれ、社会をつくる基盤である地域に着目し、問題に応える学びのあり方がどのようなものか、大阪・上町台地でのトライアル「U-COROプロジェクト」の実践をもとに探る。

はじめに

——地域から社会の枠組みの変化に向き合う

日々の暮らしをとりまく社会の枠組みが、劇的に変化している。個人も組織も地域も、その渦中で、ある者は進む方向を見失い、ある者は立ち止まって思索し、ある者は変化に向き合い新たな枠組みづくりを模索している。そこで、未来を左右する最も重要なファクターは何かといえば、地域をつくりなおす土壌を耕す、地域に根ざした横断的な学びの仕組みがあるかどうかである。

かつて高度経済成長を実現した時代は、直線的で均質な発展を是とし、学びの形式も上から下へ、一方向の知の授受だった。しかし、今求められているのは、内と外、自己と他者が、相互に影響し合いながら、再帰的な軌跡をたどって成長していく、循環型の学びのモデルだ(図1)。

域は、新たな問題解決と価値創造の沃野へと変わっていくはずだ。

知の共同化が求められる時代

——フィールド・トライアルへ

社会の最前線で試されている研究手法のひとつに「アクシヨナリサーチ」がある。社会的課題の解決を目的とし、課題に関わるステークホルダーと研究者が協働し、相互に影響し合いながら、解決への創造的な力を発揮していくというアプローチである。研究者の側から捉えると、文理が融合した社会技術の実装化のための方法論としての意義が強調される。しかし、これを地域というフィールドの側から捉えなおしてみると、アクシヨナリサーチが起動するための回路が埋め込まれた地域の基盤のあり様こそ重要ではないかという論点が浮かび上がってくる。ここで問われる地域の基盤とは、前述の再帰的な学びと問題解決のあり方を築く基盤——「知の共同化」の回路と言い換えてもよいだろう。

グローバル化や情報化のドライブは、かつて容易につながり得なかったものをつなぎ、自由と便益の拡大と裏腹に、個々の生活や地域・社会をいともたやすく容赦なく揺るがす、予測が困難なリスクを現出させている。同時に、階層格差が広がり、成長社会の規範を支えてきた中間層が弱体化し、二極化が加速する。世代を超えた貧困の連鎖は、階層間の憎悪に結びつきやすく、社会の不安定化につながっている。

異文化・階層の衝突やコミュニケーションの断絶・孤立を防ぎ、格差を緩和し、ウェルビーイングを実現していくために、人と人、人とまちの交わりを豊かにするコミュニティ・デザインのあり

学術研究の分野はもちろんのこと、行政やビジネスをはじめ実践分野でも、新たな学びの方法論が求められている。たとえば「質的研究」というアプローチが、改めて関心を集めている。その理由については、『新版質的研究入門——人間の科学』のための方法論[*1]では次のように説明されている。

私たちが生きる世界の多元化が進んでいる。その中で既存の考え方や理論がますます通用しなくなっている。複雑さを増す社会のさまざまな関係性をときほぐす上で、質的研究に特別の意義が出てくるのである。(中略)

ポストモダンリズムの唱導者たちは、大きなナラティブ(物語/語り)と理論の時代はもはや終わったと宣言した。その代わりに、さまざまな限定付きのナラティブこそ必要だというわけである。なぜなら人間に関わる事象は、それが

方が切実に求められていることはいうまでもない。だが、もっとも肝心なことは、地域における新たな問題解決と価値創造の基盤となる、知の共同化の回路をいかに日常のなかに組み込むかだ。

そこで鍵となるのは、まず目の前にある地域の様相を、関係性が生み出すダイナミズムとして感受すること。その際、過去・現在・未来を貫いて地域を俯瞰する視点を設けることによって、異なる世代や多様なルート、新旧住民や地域内外から立場や分野を横断する、参加と協働のルートを開くことである。

こうした問題意識のもと、筆者はCELにおける、コミュニティ・デザイン研究の一環として、大阪・上町台地境界でフィールド・トライアルを重ねてきた。実践のデザインにおいて、現在・過去・未来を貫くインタラフェイスとなり、異なる者の関係性を起動する可能性を持つ、地域資源(地域の特性を物語る、自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習など)の役割に注目した。知の共同化の回路を地域に組み込む方法論を模索して、CELが地域の方々と緩やかに連携し、具体的なトライアルを展開してきたのが、「U-COROプロジェクト」[*2]である。

多様性と再帰性のフィールド

——上町台地が持つ意味

知の共同化を射程に集約的な記憶や創造的規範の共有を可能にしていくための、コミュニケーション・ツールや場のあり方について試行を重ねたU-COROプロジェクト。第1ステップ、第2ステップの取り組みの概要を紹介する前に、フィールドとしての上町台地境界が持つ意味について簡単にふれておきたい。

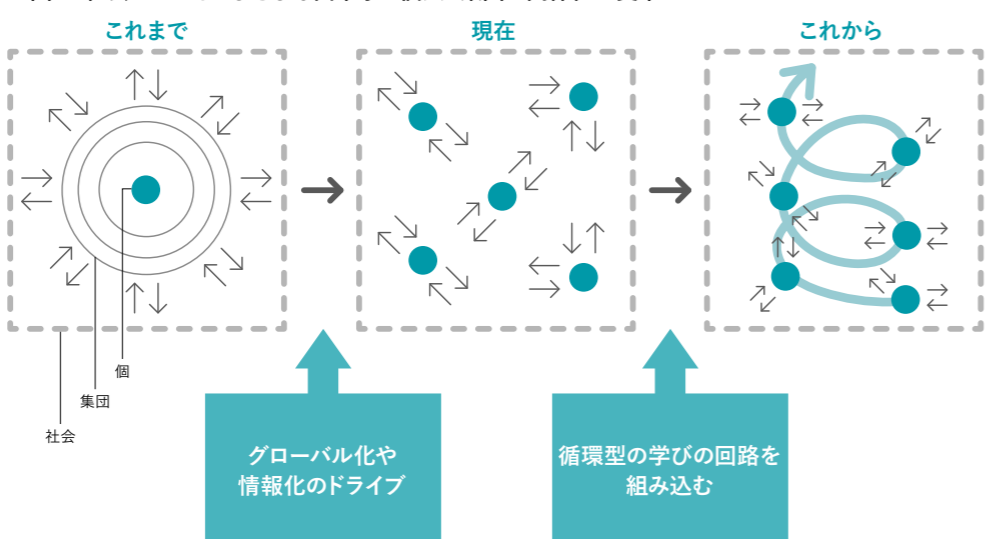
ひろもと・ゆかり
1961年生まれ。住宅建築専門誌「新住宅」編集員等を経て、1992年から大阪ガス(株)エネルギー文化研究所(CEL)客員研究員、2010年から同特任研究員。「上町台地合昔タイムズ」の発行をはじめ、生活・文化の視点から都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組み。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』(創元社)、「地域を活かすつながりのデザイン——大阪・上町台地の現場から」(創元社)など。

起こる地域、時間、状況といった特殊な影響を強く受けるからである。

グローバル化や情報化や個人化等の流れそのものを止めることはできない。しかし、そこから生じるさまざまなリスクは克服していかなければならない。新たな問題解決の現場では、一方向の理論は通用しない。むしろ、個別でローカルな時間・空間の文脈や出来事や分野や立場を超えた人々の関係性のなかにこそ、持続可能な未来を切り拓いていくための手がかりがある。答えはひとつではなく、変化する状況に応じて、柔軟に修正をかけていくことができる学びのあり方こそ注目に値する。

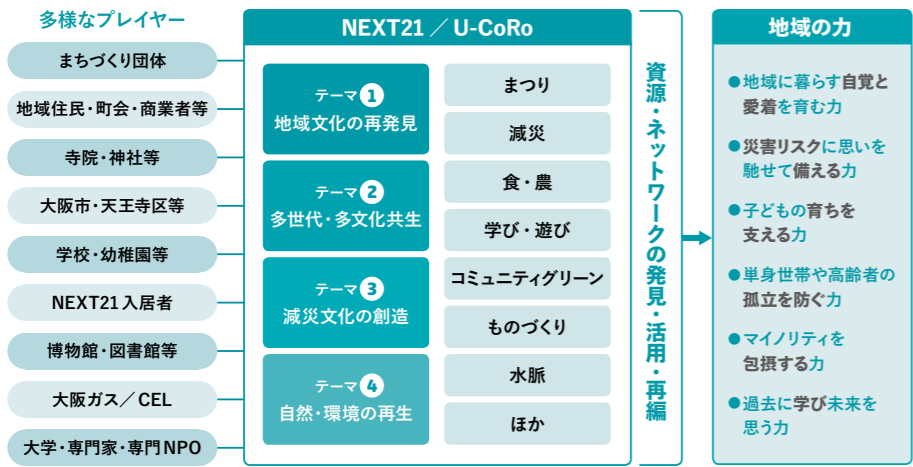
こうした見取り図を持ち、なぜ今、地域というフレームが重視されているのか、なぜそこで、学びという営みが重視されるのか、互いに問いなおすまなざしを得ることによって、足元に広がる地

■図1：社会に生じるさまざまな出来事と個人・集団の関係性の変革

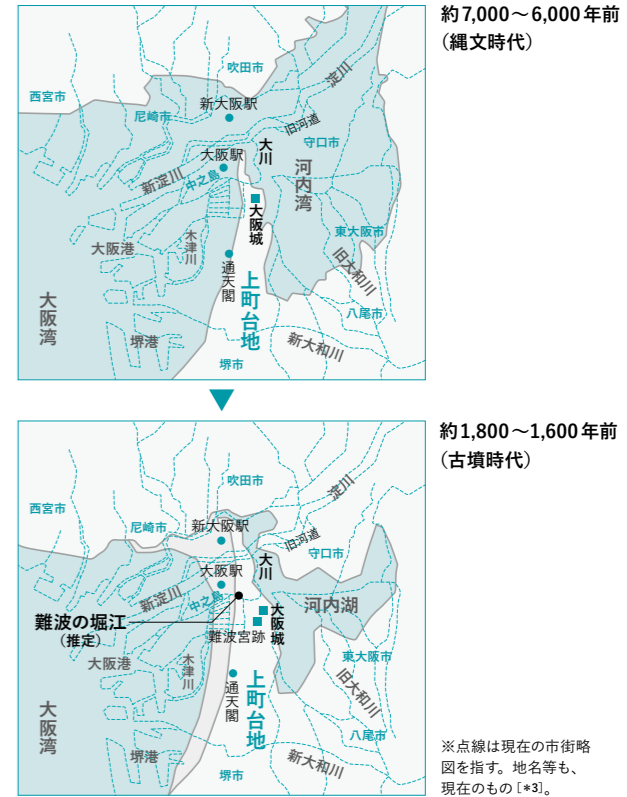


上町台地は、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である(図2・図3)。大阪城付近を北端に、大阪市内中心部を南北に貫く洪積台地で、古くは海の中に突き出した半島状の陸地だった。地政学的に内外を結ぶ政治・経済の拠点として、古代には四天王寺や難波宮が、中世から近世にかけては本願寺や大坂城、寺町が築かれるなど、日

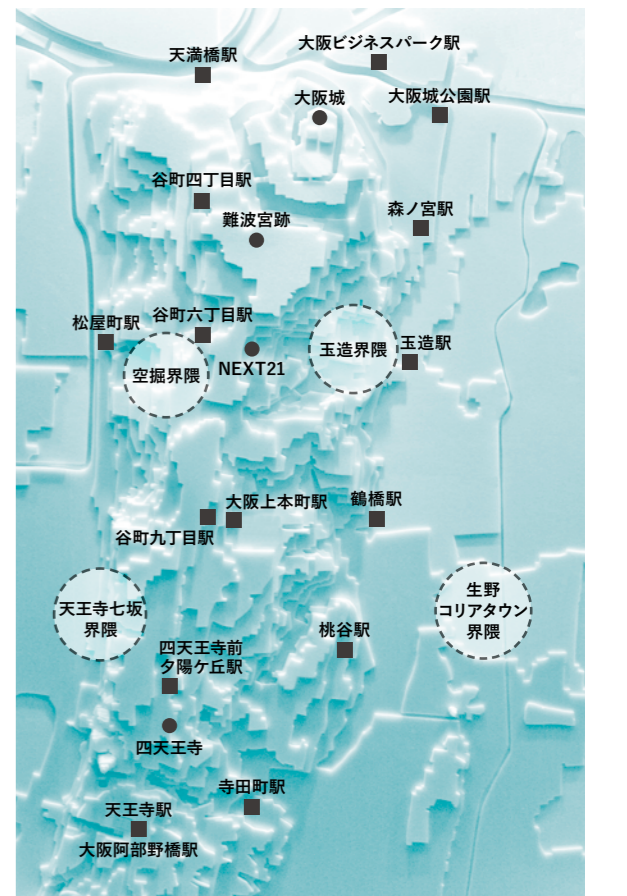
■図4：U-CoRoプロジェクト第1ステップの構図



■図2：大阪湾に半島状の上町台地が形成された



■図3：激しい歴史の転変を物語る資源が集積する[*4]



本史を裏付ける資源が集積している。また、熊野・伊勢あるいは四国に至る巡礼の発着地として、衆生の往来を受け止める場でもあった。近世には台地の西に開かれた商都大坂の輪郭を際立たせ、多様な知を惹きつけ異文化を包摂するバッファーゾーンとしての役割を發揮した。近代に入ると、大坂城を核に軍都が形成され、砲兵工廠を中心にしての繁栄を牽引した。各地から労働者を集め、台地の東や南や北に広がる沃野も「大坂」に組み込まれていった。台地上には多くの学校や医療・福祉施設等も集積している。激しい戦災も被ったが、現在も都心居住の人気を集めるエリアである。大阪ガスの実験集合住宅 NEX T 21も、この台地の中心部に立地している。

代へ、一直線に発展したわけではなく、再帰的な変化を循環させながら生き続けてきた地域であることもわかる。現在に目を向ければ、高齢化や世帯の小規模化、マンション居住者の急増などを背景に、潜在する居住者の孤立化や、災害リスクの広がり、地域自治活動の担い手のひっ迫、伝統的な行事等の継承の難しさなど、他地域と共通する課題の数々が見られる。一方で、多様な地域資源を再生・活用する動きも目立つ。たとえば、空堀界隈の街区に残る戦災を免れた長屋等の再生、玉造界隈の伝統野菜・玉造黒門越瓜の復興、寺院や神社を舞台にした文化活動やコミュニティ・サポート、新たなまつりの数々も生まれている。また、コリアタウンでの多文化共生の取り組みや、次世代と社会を接続する学習支援をはじめ多彩な人的交流も見られる。

こうした地域資源の再生・活用プロジェクトは、過去と現在、新と旧、自己と他者、ホームとアウェイといった対照関係にあるものの交わりを促進し、コンフリクトを生じながらも、長期的には地域に潜在する課題の気づきや解決への力を涵養する可能性を宿している。つまり、マクロな社会構造が引き起こすミクロな問題群に対して、ローカルな時間的・空間的文脈のなかで、解決へのプログラムが起動しているのである。

U-CoRoプロジェクト 知の共同化の回路を探る

●第1ステップ 人と人、人とまちをつなぐコンテンツを共有する

U-CoRoプロジェクト第1ステップ(2007～2012年)では、上町台地に立地する大阪ガス実験集合住宅 NEX T 21の1階にウィンドウ展示コーナーを設け、地域の物語としてのコンテンツ

を、地域の方々とともに創り上げ、伝えていくプロセスを通して、人々の交流を促し、新たな関係性を紡いでいく実践を重ねた[*2]。波及効果として、地域の幅広いまちづくり活動のなかに、減災への取り組みをはじめ、新たな気づきやネットワークを活かした実践が連鎖的に生まれていく動きが見られた。

第1ステップの手法はシンプルである。4つの基本テーマ、①地域文化の再発見、②多世代・多文化共生、③減災文化の創造、④自然・環境の再生を軸にコンテンツを構成し、ウィンドウ展示と関連するワークショップや交流イベント等のプログラムを展開する。この、地域の物語としてのコンテンツへの関わりを、人と人、人と地域のつながりを育むプロセスとしていく。

2007年から2012年の5年間に、「まつり」「子どもと遊び」「いのちをまもる智慧」「伝統野菜」「コミュニティグリーン」「ものづくり」「水の縁」など、15の物語としてのコンテンツを地域の方々とともに展開した。

第1ステップの実践を通じて、いくつかの可能性が見えてきた。コンテンツ提供への能動的な関わりを可能にするテーマ設定によって、地域に対する関心の幅が広がり、プレイヤーそれぞれの属性の枠を超えた重層的な交流や活動の兆しが見えてくること。また、潜在する地域課題に対して、地域外の専門家等のまなざしを得ることにによって、自らの暮らしと地域への問いが立ち上がり、ローカルな時間的・空間的文脈に根ざした創造的な問題解決と価値創造の回路が育まれていくこと。個々の経験を共有できる仕掛けを介したネットワークの実感が、地域に暮らす実感、ウェルビーイングにつながっていく手ごたえとともに、多様

性の獲得と共有が、自らと地域への再帰的な問いと実践を誘発することがわかった(図4)。

●第2ステップ 過去・現在・未来を貫くコンテンツを共有する

U-CoRoプロジェクト第2ステップ(2013年～)では、第1ステップで築いた関係性を基盤に、地域の方々の記憶・体験と、博物館・図書館や個人の元で眠っている資料等を掘り起こし、重ね合わせ、過去・現在・未来を貫くコンテンツを捉えなおす試みを軸に据えている[*2]。ミクロな紙媒体「上町台地今昔タイムズ」を発行し、地域の協力者による掲示や配布によって、手から手へ、街角のミクロな関係性を媒介する性格を付与している。

第2ステップの大きな枠組みの変化は、NEX T 21からまちなかへ、ミクロな発信場所の多極化・分散化を図ることによって、よりリアルな生活の場への接近を意図していることである。と同時に、重層する歴史のなかで地域に埋め込まれてきた再帰的な思考と変化の軌跡に学ぶために、地域文化の耕しの深化に力を注いでいる。

地域の価値や課題を認識するためには、それがどのような歴史的背景や経緯をたどって生まれ、現在の状況があるのかを俯瞰し、理解する必要がある。連続的な視野の中で地域と自他の関係性を認識できたとき、初めて再帰的な問いが立ち上がり、価値の発展的な継承や課題解決の方向性を見出し、未来を展望し行動することが可能になるのではないか。

こうした考えのもとに、「上町台地今昔タイムズ」を梃子に、地域資源の掘り起しと巻き込みの重層化をめざして、4段階の取り組みを展開して

■図6：今昔タイムズ 第6号



かな自然と雄大な景観」では、都市と農村の機能分担と濃密なネットワークによって成り立っていた近世・近代のコスモロジーを、当時の行楽地・景勝地の位置をたどりながら明らかにした。

第3号「なじみ・行きつけ・御用達 百貨店・商店街との思い出から垣間見る 暮らしとつながりの変化」では、まちなかの百貨店・商店街も、人と人、人と地域の文化をつなぐ場であったことを、まちなか暮らしと買い物にまつわる数々の証言から描き出した。

第4号「文画人・堤権次郎が見つめた大阪 上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶」では、大正から昭和初期にかけて、豊かな田園風景が住宅と工場が建ち並ぶまちへと変貌を遂げていった「大正」時代、その記録に努めた権次郎の作品世界にスポットを当て、人口減少期に入っ

た都市の未来にまなぎしを向けた。

第5号「思い出の映画館と身近なまちの戦前・戦後」では、「大正」時代、空前の市街地開発と賑わいの前線で、暮らしのすぐそばに、欠かせない娯楽の場・映画館が開かれていった様子に迫った。身近なまちの映画館の盛衰をたどり、埋もれていた資料を掘り起こし、戦前・戦後の失われた地域で生活史に光を当てた。

第6号「昔も今もなにわ名物『玉造黒門越瓜』物語」(図6)では、2002年に玉造の地に戻ってきた、なにわの伝統野菜・玉造黒門越瓜の縁起をさかのぼり、豊臣期大坂から徳川期大坂への政権交代による土地利用の変化や、奈良・伊勢への出入り口に位置する地の利が生んだドラマに迫り、食と暮らしの関係性の今後を展望した。

第7号「伝説の生玉人形とたどる ものづくり

と文化の原風景」(図7)では、上町台地で今につながるものづくりの源流から、芸能とものづくりの申し子ともいえるべき「生玉人形」をはじめ、郷土玩具の数々を生んだ風土に、創造都市・大阪の原風景と将来像を重ねた。

第8号「有為転変、世情によりそい願いを映しよみがえるお地藏さんとまちの暮らしの縁起」では、お地藏さんの習俗・文化をたどり、幾多の時代の荒波を被りながらよみがえり続ける姿を追い、コミュニティのレジリエンスを担保する知恵に迫った。

第9号「はじめは上町台地 “知” を運ぶ本のまち・大阪の軌跡をたどる」では、古代・世界に開かれた最先端の“知”の港に始まり、近世・近代には時代に先駆けた“知”の開拓者や媒体を生み出したまち・大阪を振り返り、その原

■図5：U-CoRoプロジェクト第2ステップの組み立て

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
1	「上町台地 今昔タイムズ」の発行(年2回)を通じた、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続					
2	「上町台地 今昔フォーラム」の開催(年2回)を通じた、ネットワーク形成と情報共有の場づくり					
3	「上町台地 今昔フォーラム ドキュメント」の発行(年2回)を通じた、資料・証言・知見の記録と社会へのフィードバック					
4	毎年4～8月にかけて、玉造黒門越瓜の、栽培・料理の持ち寄り・交流・「しろりnews」を介した、地域住民から専門家まで、多様な立場・分野のネットワーク形成と情報共有					



上町台地 今昔フォーラム 第8回



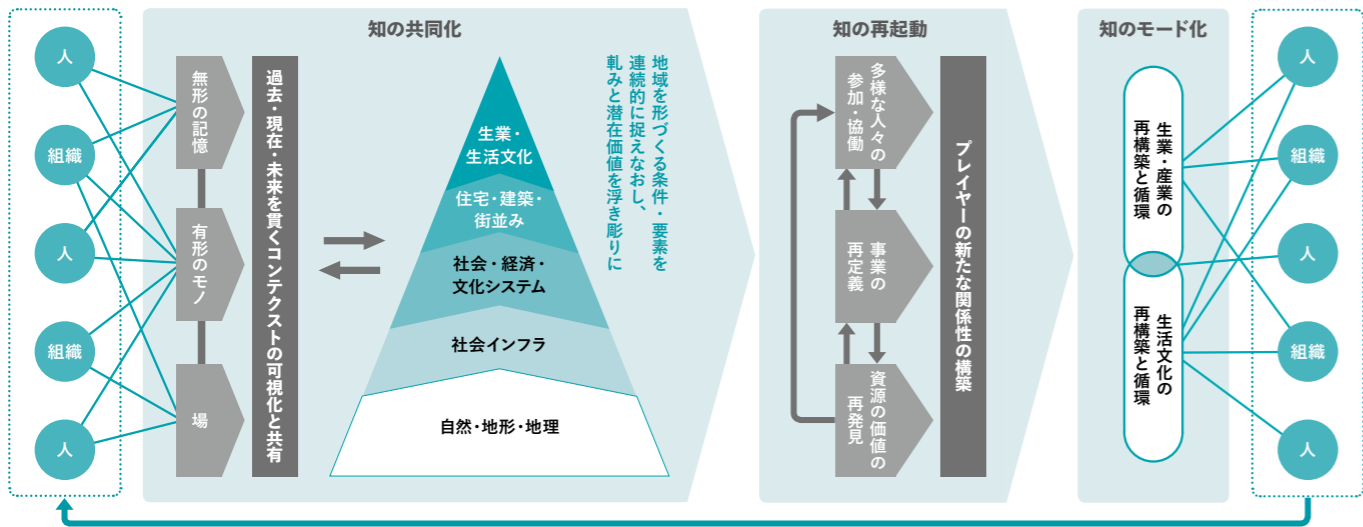
いる。①「上町台地 今昔タイムズ」による、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続、②「上町台地 今昔フォーラム」による、市民の知と専門家の知の水平な接続と視点・論点・情報共有の場づくり、③「上町台地 今昔フォーラムドキュメント」による、資料・証言・知見の記録と社会へのフィードバック、④地野菜・玉造黒門越瓜「ツルつなぎ」プロジェクトによる、しろりの栽培としろり料理の集いを通じた生活文化の醸成と、分野や立場を横断する共感の土壌づくり。①③は相互補完的な関係性によって知の共同化の幅を広げ、④は①③の苗床のような役割を果たしている。①④が連動することによって、地域住民(新旧)、地域活動団体(地縁型・テーマ型)、地域商業者・企業、社寺、学校・幼稚園、研究者・専門家、メディア、博物館・図書館、行政、他地域住民、他地域活動団体等、多様な属性と背景を持つプレイヤーが対等に出会い交わる関係性が担保されている(図5)。

「上町台地 今昔タイムズ」第1号(2013年秋・冬号)から第10号(2018年春・夏号)で、可視化したコンテキストを俯瞰的にぎゅっと眺めてみよう。

第1号「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」では、近代の鉄道網の発達とともに、急激に進んだ都市の拡大が、地域をどう変えていったのかに迫った。マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験知として共有することをめざした。

第2号「浪花の町衆が親しんできた 近郊の豊

■図8：知の共同化の方法論=地域をつくりなおすメカニズム



そこから望むべき未来へ、それぞれのまなぎしの軌跡を描いてみる。知の共同化の回路によって意識の階層移動を可能にするプロセスが、大きな社会変革の力を秘めていることがわかる。

おわりに

知の共同化の回路を地域・社会に組み込む

社会の枠組みの変化とともに、再帰的な学びと問題解決のあり方が必要とされているという、大きな見取り図を携えて、多様性と再帰性の履歴をふんだんに宿した沃野・上町台地に分け入り、U・CoRoプロジェクトの歩みをたどって、知の共同化の回路を探ってきた。

第1ステップでめざした、多様性の獲得と共有は、自らと地域への再帰的な問いと実践を誘発し、第2ステップでの過去・現在・未来を貫くコンテクストの共有へのまなぎしを開いた。そこで浮き彫りになった新たな視座が、まちな姿・暮らしの形を成り立たせている要素の関係性の再認識と、再構築の必要性。さらに、変革のエネルギーとなる、意識の階層移動のベクトルの重要性である。

紙幅の都合で詳述はできないが、プロジェクトに参加した方々の連鎖的な動きや意識の変化のなかに、知の共同化の回路がもたらす効果を読み取ることができる。たとえば、大阪くらしの今昔館のボランティア（町家衆）の方々による、生玉人形をはじめとする郷土玩具再生の取り組みの立ち上がり。地域の人口構造の偏在が進むなかで、新旧住民の結節点となる地蔵盆を維持するための知恵のシェア、フリーライドから一歩踏み出したという若い世代の意思表示。伝統野菜・玉造黒門越瓜の栽培と料理を媒介して、農業の実践者と食や建築のビジネスの担い手、子どもの成長の支援か

注

*1 『新版 質的研究入門—人間の科学—のための方法論』（ウヴェ・フリック著、小田博志監訳、2011年、春秋社、13・14頁）

*2 U・CoRoプロジェクト（第1ステップおよび第2ステップ）は、大阪ガス㈱エネルギー文化研究所が主催し、U・CoRoプロジェクト・ワーキンググループが企画・編集に当たっている。プロジェクトの詳細、発行物等はホームページにて公開している。
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

*3 『続大阪平野発達史』（梶山彦太郎、市原美、1985年、古文物学研究会）の資料ほかをもとに作成

*4 U・CoRoウィンドウ・エキシビジョン06で制作した立体模型。土地の起伏を強調して表現している。

*5 岡田憲夫氏が『地域（マチ）復興のためのゼロからの挑戦と実践システム理論』ひとりから始める事起こしの手ずみ—鳥取県智頭（ちず）町30年の地域経営モデル（2015年、関西学院大学出版会）42頁で、「五層モデルに見立てた『生きた地域』の複層基盤の構造」として示している。「基（第1）層 自然環境」「第二層 社会環境」「第三層 社会基盤」「第四層 建築空間・土地利用」「第五（最上）層 生活・活動」を参考にしている。

■図7：今昔タイムズ 第7号



点・上町台地からこれからのあり姿を問うている。第10号「稀代のなにわ名所案内 暁鐘成と再びめぐる上町台地 食が結ぶ高低・聖俗交わりの風土」では、幕末・大坂の博覧強記の絵師・戯作者「暁鐘成」のまなぎしを通して、人と風土、人と人が交わるモードとしての「食」（名物・名所）と都市の関係性を読み解き、今、改めて都市が必要とする機能を掘り起こす機会とした。

新たな視座とベクトル

——地域・社会の構造を貫く——

コンテクストの可視化を積み重ねていくことによって、認識を新たにした視座がある。地域・社会を形成していく過程で、当然のことでありながら、今や日常生活のなかでも、まちづくりのなかでも、ビジネスのなかでも、意識の外に置かれて

しまっているポイントである。

地域・社会を形づくっている要素、たとえば「自然・地形・地理」、「社会インフラ」、「社会・経済・文化システム」、「住宅・建築・街並み」、「生業・生活文化」「*5」。これらの条件や営みが関係し合うことによって、まちな姿・暮らしの形が生み出されている。問題なのは、高度成長期を支えた社会システムによって、これらの関係性が分断され、覆い隠され、関係性の再構築が喫緊の課題であるにもかかわらず、そのことに気づくことさえ困難な状況に慣らされ、社会の構造転換がもたらすリスクにさらされていることだ。

「上町台地 今昔タイムズ」が可視化したコンテクストは、結果としていずれも断絶した関係性の再構築を志向している。過去・現在・未来を貫くということは、突き詰めれば、これら地域の営み

を支える要素を連続的に捉えることによって、関係性の軌みを見出し、潜在している新たな価値を引き出し、関係のあり方を組み立てなおしていくことを意味する。多様なプレイヤーの参加と協働を重視することもまた、これらの要素を連続的に捉えることによって、関係性を健全化・活性化していくことに通じる。

また、関係するプレイヤーの多様性とともに、プレイヤーの関心と意識のベクトル、方向性と量（動き）を持つエネルギーに注意を払う必要がある。「過去」——「未来」を横軸として、縦軸に「共」——「私」、「ポジティブ」——「ネガティブ」、「リアル」——「バーチャル」といった軸を設定してみよう。多様なプレイヤーが、現在立っている位置、過去に生きていたプレイヤーたちが立っていた位置、未来のプレイヤーたちが立つかもしれない位置、